

●高澤良一 第十二句集 暮津

●七月―九月

つままれることをいやいやする毛虫
病葉の散るがきっかけ降り出せり

旅は寄り道夏牡蠣育つ日本海

一様に寿命は伸びて心太

ゆすり蚊と名越の祓受けにけり
瀬戸神社

勤め人茅の輪せかせか潜りけり

蛇の髻の花気がつけば雨小止み

天気予報出掛けに聞いて竜のひげ

もう齡かビールのピッチあがらずよ

朝の蛾とぶつかりさうに草っ原

月光にダチュラ怪人佇つごとし

夏風邪にうだうだ咳きとお恥ずかし

夏風邪の眼を茫々の海へ投ぐ

夏木伐る使はぬ筋肉使ひもし

パイナップル熟れきってゐるお仏壇

蚊を打ちては草引く手順繰り返す

自動点滅街灯梅雨の灯を点す

射干咲きあたりジメジメして来たる

夏風邪引く面目なしと云ふ他なく

見るからに雨が重荷のカサブランカ

火取虫火取始めの音のおどろ

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

雨の日も夢見る合歡の下田港

搏てる音頼りなければ蚊を逃がす

大胆な女と水着を見て想ふ

彩どりを抑えし水着長女なる

ガーデニングなんて洒落ても汗仕事

端居してまじまじと見る爪の土

薄光る切傷撫でて夕端居

花合歡の上を舞ふ揚羽うはの空
罌粟の昼キュンと音して砂糖溶け
かなぶんの現行犯を投げ撲ちぬ
一言に気分害しぬなめくじり
朝顔にあいにくの雨上がらざり
藪つ蚊をまたぞろ誰が引き込みし
梅雨晴間うどん粉病をやむ庭木
向日葵の意気軒昂に接す朝
長雨がたたり向日葵ひよろひよろ立
汗っかき前置きにして言訳云ふ
汗流るむずむず虫の這ふやうに
踏めばそこ雨の滲めり白雨あと
手つかずの溝萩に風拡がれり
溝萩の謔けさ破り泥鱒捕
竹木石何でも登る蝸牛
燕ゆく方が海なり逗子銀座
霊界の入口に百合佇つごとし
七月の食器洗はれ置かる音
パイナップルえぐ味の針が舌を刺す
雷の楔を入るゝ相模灘
雷獣の千里を駈くる光ゲ見たり
海の家ほつりほつりと建ち始む
鏡当浴場の鏡広告なら(有)三宝社へ告つゝてふもの湯屋に吊忍…。係員参上
板の間にへタリて銭湯納涼図
雨の日もお祭りさわぎ凌霄花
白粉花散るは浪費といふ風情
団扇畳にほいと投げだし昼寝せり
瓜の種そこと云はれて顔撫づる
蝸牛さうださうだと頷けり
朝顔蔓おいおいそこは物干竿
ビル風に涼んでゐたり病院裏

シネマ冷房空席冷えに冷えぬたり
ラムネのごと 「コ」の三文字昇り来る
さくらんぼ片目つぶりてまだ酸しよ
繡線菊の愛くるしさに接しけり
けふも又雨かやれやれさくらんぼ
飯の量注文つけて鰻の日
鰻喰ふ客を横目に鰻喰ふ
山滴る箱根に手づくり豆腐屋あり
さくらんぼ茎を抛るが面白き
男手の何でも突っ込む冷蔵庫
足速き夏の魚は酢でめて
「あ、雨」桜桃口へ運びつゝ
遠雷は響かず雨が蓋をして
薄暑来て始末の悪きチョコレート
芋殻火を跨ぐ仕種が身について
抜け気味の夏風邪妻よ無理するな
鉢植えの蕎麦屋の風船かづらかな
風往いなすことにかけては宮城野萩
当地ユウスゲ 軽井沢にてではアサマキスゲと呼ばれもし
アメリカ芙蓉国家斉唱のごとし
亀虫の一団鬼灯荒らしに来
風鈴の臨時の舌とてボール紙
花ダチュラだらんとぴちよぴちよ雨の路地
凌霄花テレツクテンと咲き昇り
この家にはこの家の家風おかたらのお
荒梅雨にぶつくさ云ひても始まらぬ
子蠅螂生意気構ひたくなりぬ
追憶を肴に老の麦酒乾す
散髪してサツパリすれば暑のやはらぐ
かうなれば開き直りて氷水
氷水搔き止め遠きもの見つめ

冷し酒お先走りもいいところ
山妻のこまめに出せと汗のもの
鉢朝顔ご丹精とぞ褒められし
虫刺され酸の如きを裸身に
ザツと雨ササササと風軒簾
スコールは洋上はるか固め降り
向日葵に劣らぬ笑顔のヘルパーさん
蠅たかる所をそれとなく見居り
蠅を退け遣るに止どめぬ老の箸
文机へかなぶん落ちて紙の音
急ぐ蟻そこで道草喰へる蟻
指の蟻吹き飛ばさむとして三度
暴かれし蟻の寝殿造かな
あば
蛞蝓の光を溜めて薄笑ひ
麦こがし老と片づけきれぬこと
力要る老いの脱糞麦の秋
囟に乗りて蓮に乗り上ぐあめんぼう
暑き日々俳句詠むにも糞ぢから
ポーチュラカ何處かとぼけしその響き
ぢゃんぢゃんと火焰樹の花咲き継げり
少し手に余る花なり夜顔は
献身は人目につかず鉄線花
云ふに窮してそこまで云ふか水中花
氷水真っ赤なやつに歯が浮いて
冷奴本心さらりと云ひ退けし
扇風機夜はぼつねんと座せるのみ
脛の創これは彼の時夕端居
身ほとりに好みの団扇取り揃え
昼顔に尽きざるガードレールの白
銭湯のタイル流るゝ泡涼し
燃え尽きる迄燃す芋殻の切れっ端

雑草あらくさは露を蒐めて魂祭

ごきかぶり団子喰らひて御用となる

少年の溺愛鋏形剣闘士

曉齋河鍋曉齋の蜘蛛出づ月の怪しき夜

妖怪の親玉何故か女郎蜘蛛

水打てば庭木喜ぶことしきり

ほつとせる貌を納涼夕雀

かなぶんのその実じつよからぬ虫と聞く

かなぶんを音として聞くよからぬ音

かなぶんを色として見る至福のいろ

黄金虫吾がたなごころ掌たなごころ蹴りあるく

ぶん空襲警報下、母幼稚園に迎えに来ること再三と聞けばぶん詐欺頻発やぶん飛び来し艦載機と飛び来し艦載機

尺蠖詐欺頻発や擬態は怪しき商ひにも

芋の露面白ければ覆す

尻のさき待ち針いろの糸蜻蛉

油虫厨をちよろちよろ醤油いろ

一人舞台ひとり演ずる火取虫

血を吸うてあからさまなる藪蚊の腹

夏風邪に昇れる月のうすぼんやり

唇のごとくなめくじ歪みけり

この匂ひ鮓の煮付け夏の月

暑に徹るこゑてきばきとヘルパーさん

金魚掬ひまだ諦めぬ姉の意地

凌霄花散るに興じてはめ外す

昼寝してカタクチイワシの群るゝ中

翅休め昭和の遺物扇風機

瘡蓋の黒くかさばる大暑かな

追ひ回し遂にデメキングットの子

がさつかせ茂みの虫を捕る雀

快音と共に昇天手打ちの蚊

指の間残る大暑の薬粒

元氣づけ赤紫蘇巻のにぎり飯
ポケットの小銭ちやらちやら炎天へ
莫迦となる錠や西日の硝子窓
帽子などなくてもへっちやら炎天ゆく
骨折のそれでも使ふ古団扇
家居とは無言なる行大旱
床擦れの我が身離れぬ早かな
ぎすぎすした物言ひになる油照
油照起死回生の一手欲し
もう一軒寄ってゆかねば日の盛
土けむりぱっぱと打水ぼたぼたと
打水のぽかぽか木の音草の音
納豆のやっかいな糸朝ぐもり
夏バテに百合根など佳し煮てお呉れ
かほる方振り放さげ見ればカサブランカ
夏期講座先生三角定規もち
体調を崩してだうする焼蒜
しけた音残して揚がる昼花火
冷蔵庫内部は蛙の胎に似て
往生すぎうぎう詰の冷蔵庫
手を変へてトマトの料理朝昼晩
肉じゃがの鍋に漁る大暑の肉
ご無沙汰の鰻に箸をつけにけり
家暑し駄菓子にろくなもの無くて
曉桐箏笛にも沁みにけり
曉桐四声が程に途絶えけり
朝もぎの「つ」の字「く」の字のへぼ胡瓜
へぼ胡瓜ヘルパーさんにお裾分け
商店街海鞘を横目にうち過ぎぬ
夏掛の柄古ぼけてごろ寝かな
丁寧ていねいに生きて蓮のこちら側

朝曇妻の指さす食べこぼし
寺々の中でも出色この紫薇は
昼寝覚辺り白みてそっけなし
定食屋蠅帳があり勝手にとる
だるさうに横たはりゐる夏の海
青芭蕉風にはためく湯屋の帰途
西瓜の出来上出来で無しス力でも無し
はつきりせぬ虹の七彩折衷案
退職の挨拶兼ねて夏見舞
網走の市にて初見才オカミウオ
暗闇にてカサブランカの香のふい打
山百合の匂ひを削ぎにザツと雨
盃蘭盆の仏飯一夜にて乾ぶ
ごきぶりを追ひ遣る妻は総身もて
家居して大いに退屈水中花
菓子袋くしゃくしゃにして暑を譏る
昼寝より覚めてはてさて妻いづこ
鉛筆はH金亀虫の固さ
とんカツの旨き盛夏となりにけり
水切つて醤油をかけて冷奴
白塗のバルコン滑る蝸牛
夏旺ん紅茶はベルガモット入り
でっぷりした夜店のおばちゃん焼蕎麦焼く
匂ふ海これより花火一萬発
団扇の辺通りすがりの蟻一匹
くらがりに何運べるや真夜の蟻
この涼しさ訝り肌着に手を通す
夏着数枚年金暮しはシンプルに
卸かけ麻のしちめんどくさい肌着
遺品よく片づきをりし夏座敷
バンザイサイパンのこゑこびりつく仏桑花

水中花葉は処方箋に基づき
忘れがちそれでも金魚生きてゐる
布袋草残り金魚は死に絶えし
葛饅頭何が喰いたきかと問はれ
暑氣払やるかと妻は探り入れ
籐椅子に腰を浮かせぬまた余震
片膝立て地震に身構ふ端居びと
甚平の腰泳がせて地震最中
地震あまりに激しく網戸に手掛けしまゝ
大相撲地震の画面に切り替り
蜘蛛の糸ここら辺りとたたつ切る
雷にい行くうしろを断たれけり
夕立に何處か伸び伸びして晩酌
逃げし後また来てわれを弄する蚊
迎え火は共に 送り火はひとり
ただ魂消土用の地震のなすままに
ところどころ言葉が消され大夕立
真炎天ピシと音して割けるもの
上ずって蟬音何とも幼かり
君の磊落南瓜の花に相通ず
夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち
藪つ蚊か脛に感じる圧少し
ぶんぶんは緑の鎧着し騎士ナイト
ポンポンと咲いてポンポンダリヤとぞ
ハーモニカ上手な軍曹シネマ夏
夏瘦の肋凹ませハーモニカ
巻き舌に夜涼呼び込むエルチヨクロ
真夏夜の弦切り刻むカナロ・エン・パリ
昼寢覚檻樓が起き出す如くなり
棒のごと瘦躯横たえ暑の極み
水中追憶りジャカルタコーラン聞いて遙かな目

惣領に生まれ夜濯ぎなど不得手
暑はいまだ序の口ご自愛なされよと
一線を越えてどどど大夕立
炎天孫来し笑顔が家に上がり込む
夕立に降られて肌着総取り替え
へたる夏何かと云へば生卵
ゴム引っ張りばちんとやりぬ海水着
羽蟻退け遣れば又来て小奴めが
てのひらを返すごとくに夕立来
夕立のあと何處となく大胆に
大夕立など何糞の一油ユセシ蟬
夕立となりて万象雨隠れ
夕立に容あるものみな打たれ
二階より母の見てゐる大夕立
夕立の涼気杉より檜より
地を抜かんばかりの釈迦力大夕立
夕立といふ一快挙ありにけり
夕立といふ快音を広げたる
夕立のみるみる上がりとっぴんしゃん
ふしだらな部類に入る凌霄花
旱星創は乾かすこと大事
パジャマ這ふ蟻を畳に下ろし遣る
求道的たること今も雲の峰
雲の峰崩るることを厭はずに
艱難は切り抜けてこそ緋のカンナ
音を上ぐるものこのゑ聞く暑の極み
蜻蛉を捕ふにへんな手つきかな
考へて大暑を味方につける策
程々に手を抜くことも鎖夏のうち
真っ当にあたらぬがよし朱夏万端
午は昼寝に徹すと決めてやせっぽち

濯ぐべきものくらがりの一隅に
ものさしの目盛薄るゝ大暑かな
風死すなか脛毛の薄きところかな
この暑さお手あげ水をのむばかり
水たっぷり飲みて眠気と暑氣払はむ
牛よりも鈍し大暑の身のこなし
草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊
サーファーに勝手の違ふ風が吹き
サルビアの一斉咲きといふに遭ふ
朝顔の蔓に誤算のあり漂ふ
夕立にちからづけられ食すすむ
炎ゆる昼人に二つの呼吸法
潮浴びのでぶちゃん波を跨ぎゆく
ぴっちりと水着着込めばいるかの胴
蚊いぶし吸ひ脚をじたばたじたばたす
雨降ればもうめちやめちやに未草
後樂園池に蓋する未草
鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑
水底についと向き変ふ岩魚の斑
人一倍長けて気位高き百合
夏の夜の字幕に友情出演と
夕雲を見つゝ涼とる妻共々
のうぜんになまぐさき風起ちにけり
向日葵の育ち盛りの大きな葉
サルビアやその場しのぎの日を重ね
うだる日を背を押すやうに送りけり
仏壇のおさがり貰ふ盆雀
蟬の穴探し切りなしもう止めた
ご近所での蟬捕上手肉屋の子
したたりを許さぬ蛇口終戦日
水のみに起つ昼蟬音の締め無き

岳父の世話そんなこんなで一夏過ぐ
蝸に鳴きねばられて夕日の樹
コンビニに蝉と蝉がら持ち込む子
空蝉の一つひつつく常夜燈
歳時記の蠅の例句も古りにけり
大木にとりつき鳴ける蝉反り身
青萩に当りてあらはなる風筋
盆の家いい塩梅に風が抜け
天上より萩を押しつけ吹ける風
萩に風姿乱せる萩に風
向日葵のぐでんと水を欲しがるさま
捕虫網ぬうっと蝉の背後より
ぶるぶると鳴かぬ朝蝉木を替えて
檻褸のごと寝ねて夜蝉の短鳴き
朝蝉の鳴き出すまでの樹のしじま
女郎花容れて一景なまめきぬ
雲の峰あらあら崩れ始めけり
けふの暑さ鰻のぼりと聞き凹む
テロ企つ奴は穀象より劣る
炎昼の古漬噛めば澄みし音を
真夏日のがちやんと癩に触る音
向日葵を一呑みにして陰しき雨
大象の大暑の牙の薄光り
脂っ気もうなき髪を水洗ひ
盆に入る朝の煮炊きの炎をながめ
大井川渡りざりがに採りにゆく
少年時代回顧
連結車輛の数の当てっこ終戦日
鉄路に釘均らす遊びを終戦日
その本は今も何處かに終戦日
空ら響きして脛の蚊をうち洩らす
滾る暑の底の方より油蝉

雲の峰肋バタバタ叩きみる
炎天に思ひ浮かばぬもの名前
暑にああと四、五軒先の赤ん坊
糲穀の音の中なる曉蝸
曉蝸一つ遠くに際立ち来
桃剥くと妻のむっちりせる上肢
ぶんぶんの遊び半分灯を取りに
ごきぶり打つ力余りてこの始末
気がつけば形無きまでごきぶり打つ
端居してしみ・しわ・ほくろなど数ふ
実向日葵故人の笑ひかけるごと
向日葵の見通せぬもの無きごとし
向日葵や真にひとりとおもへるとき
蟬の穴同士近くて愛しけれ
百日紅花より幹の至福相
西瓜売軽トラで来て店開き
くたくたよ三時の葬ならずとも
物故者一名俳誌八月号末尾
赤裸々に生きていりやこそ百日紅
ともかくも生きていりやこそ冷奴
口癖の「生きていりやこそ」夕焼見て
蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの
もう既にこゑの森なす朝の蟬
朝の蟬潮のごとく退くときあり
朝蟬のいつとはなしに一潮流
蟬捕の蟬を鳴かせて通りけり
芙蓉食ふ虫は小奴でありにけり
浮輪の子嬉々と寄る波跨ぎゆく
とりあへず海月のやうに浮いてみな
百蟬せんの中の一蟬たち優る
蟬音いま空中楼阁なせりけり

界限の木々に目配り蝉捕る子
やせつぽち灼ける海見て怯みけり
浮袋二箇膨らます役はパパ
蝉の穴ここに集中する訳は
杜の蝉勝手に幕を引きにけり
鳴くしきやない蝉のいちにち了りけり
直言句評こそ待たるものや栄螺の腸わた
句に触れて何を申すか昼行燈
器用に世渡りて海月の優柔を
浮ついた海月の部類に吾も入るか
ヒリヒリと蝉音あたりが暮れてくる
減る蝉音聞いて山妻厨に立つ
蝉殻のそこで時間が止まりをり
朝蝉の勢ひたてるが元氣の素
蝉時雨人は勤まることをして
手短に鳴ける夜蝉の空元氣
どんぶすと岬辺りの遠花火
朝蝉に鼓舞され我流体操す
蝉殻を剥がし欄干歩まする
賽銭箱のぼり詰めたる蝉殻あり
捕虫網かなぐり捨てて鳩追ふ子
文机に書きかけのものつくつくし
ゆふがたは涼しきものと期待して
夕かなかなやつつけ仕事一頓挫
死してなほ蝉の目鼻の剛健に
大川に溺れて真水のみしこと
蝉止まれりや何處でもよいといふ風情
蝉捕りの極意は逃げ来る蝉捕れと
空蝉の風雨に目鼻古びざる
よく探さないで物云ふ暑さかな
先生は暑き日選び逝きなすった

瘡蓋や一夏過ぎむとしつつあり
鼻っ柱少し日焼けて水を遣る
秋刀魚食ふ敢えて値段は聞かずにおく
早起きを励ます蝉も減りにけり
端居人臍の掃除をして居れり
神主のやうな顔してバツタ現る
白日下色を増しつつをみなへし
妻は鰯わたしは平目熱帯夜
一日の疲れ蚊遣に巻かれゐて
くるぶしに透く静脈や日の盛
象牙の箸浸しあるなり晩夏の水
日盛りの音たて壊す菓子袋
ひまわりの一哲人にゆき遇へる
蝉殻を終には壊し始めし子
鳴きざまの朝からなげやり秋の蝉
凡百の蝉に占められ官幣社
長生^{岳父}きしてさやかに使ふ象牙箸
ぞりぞりと晩夏の魚の鱗剥ぐ
模糊として口の開け閉て晩夏の鯉
粋な昼餉つめたき南瓜のスウプかな
鼻つまみ鳴き継ぐ蝉の盛夏過ぐ
夏曉^{なつあけ}のぼんやりしてゐる頭と手足
朝の蝉聞き流しをり床の中
大暑には頭使はぬコップ拭き
いとたやすく手捕らる蝉となり果てしか
美学にして幾何学ヨットの帆走は
浮輪の子おどおど臍の深さまで
校庭の鉄棒に寄り踊り見る
盆踊雨の様子見して再開
豆腐屋の娘めかして盆踊
山妻は根っから陽気踊りもラフ

新作の踊りに挑む影法師

踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子

朝から翹バタつかせゐて残る蟬

団扇絵は漢をこを転かす女武者

「糞暑いねえ」と自転車行き交へり

虫籠の中はと見れば蟬の殻

雀来て群がる盆の変電所

衰ふるもの目に見えず夕端居

蚊の刺せる處膨らむ天の川

いつもより早めの夕餉芋殻焚

芋殻焚日暮れひとえに待たれけり

わらわらと芋殻燃えけり石の上

芋殻火にめいめいの頭をよぎるもの

蟻ちよろちよろする居間なれば菓子こぼさじ

木斛に晩蟬こゑをたてずにゐる

へくそかづら攀ずる金網灼けてをり

句を貶し海鞘に談論風発す

「ただいま」と芋殻抱へて妻戻る

芋殻焚うすくらがりに溜まる煙

芋殻火の果てたる闇に炭の香す

落胆のこゑ葬のほとりより

晩夏おそなつをたとへて云へば座礁船

船体のごとく傾き始む夏

向日葵や還らぬものを猶おもひ

向日葵の司どる海荒れむとす

その目つき何暗示せる実ひまわり

実向日葵ブラックホール引き込みて

実ひまわり典座てんぞのごとく佇つタベ

ひまわりの火の性しやう天より頒たれて

実ひまわり今は落ち着き土の性

蝉しぐれ漫然と聞き横坐り

ひまわりの彼方夕栄え未帰還機
生彩無き盆花なれど仕方なし
トネリコの微光放てるその青葉
立秋の掛け声ばかり臍のゴミ
落蟬の翅ヒクヒクとさきほどまで
玉子割れば黄味の生き生き敗戦日
はらと落つ抜け毛のあたる裸かな
真水飲み噎ぶ八月十五日
もの溢る屑籠八月十五日
疎開^{疎開地 静岡 島田}して生にんにくを虫下し
やみくもにティッシュ渡さる街薄暑
ひっちぎる日めぐり八月十五日
炎昼をふうふう言うてコップ拭き
硝子器の汚れ目につく大暑かな
それなりに数つけにけりミニトマト
プチトマト朝夕の膳賑はせり
二夜連続戦争ドラマ熱帯夜
氷水舌の形が判りけり
ひまわりの一つ目小僧月下に聳つ
天日に撲たれ強しよをみなへし
物匂ふ世が嘗てあり冷蔵庫
羽抜鳥どころか鏡のわが瘦躯
盆花の活けある水のすぐ古ぶ
炎天をのこのこ訪ね来る御仁
炎天下へたに歩かぬ方がよい
もう少し肥りたけれど胡瓜揉
手術痕古ぶばかりや夕端居
ジヨッキ挙げわれらウルトラマン世代
蝉鳴き出す空襲警報発令と
強靱な蝉の肋を仰ぎ見て
はだけあゝる肋に韻く夏の雨

残る蝉非力非力と鳴けるなり
盆僧の頭下げ下げ隣家辞す
路地明けて来るなり芋殻の燃え殻に
古団扇やれやれけふも了りけり
ぶだう一粒地球のやうな愛しさに
西瓜食ぶ間にピッチャー立ち直る
松葉牡丹よく咲き未だ咲き猶咲かむ
蚊の刺せる箇所は真っ赤に掻き壊す
網戸に隙道理であちこち喰はるるよ
香煙の立ちのぼる中匂ふ桃
電線揺れ地震の間飛ぶ蝉見たり
半ズボン地震来て咄嗟に入るゝ足
驚破地震と咄嗟に裸にはおるもの
晩夏の地震母は二階の揺れを言ふ
地震に発つ蝉のおろおろ飛ぶばかり
飛ぶさまは愚直そのもの残る蝉
飛び方を蝉に手ほどきして遣りたし
飛び下手の頭でっかち油蝉
飛ぶ蝉のいづれも路頭に迷ふさま
幾つもや月夜を蝉の魂昇天
方向がちがふと羽根を返す蝉
着艦に似たり油蝉あひらの止まり際
バタバタと啞蝉あたり昏れしめき
昏れて来て蝉音半減又半減
夕方の風が出てきて減る蝉音
長たらしく鳴いて鎮守に残る蝉
つまむ手のひつきりなしに夜のぶだう
夏の夜の宴昭和のタツプかな
日の盛りカレー粉の素炒る香のす
海夕焼け未だ償い足らぬかに
簔草雨に優しさ加はれり

瘦せ向日葵勤王志士にさも似たり

実ひまわりそっくり返ってしまはぬか

葬昨今の新聞紙上を見ればの耳を疑ふ怪事件

がぶがぶとピカドンの日の真水のむ

眼も耳も広島の忌も皆風化

防諜と殺戮向日葵知っている

憲兵のごとき眼をして実向日葵

日課となる朝顔の世話水の世話

顔面の蚊打てば眼ちぐはぐに

お迎えはまだまだまだよと蝉啼けり

郵便夫配り損ねて炎天くる

蝉声のおっと止まった誰か来た

蝉時雨ときにはうねることのあり

こりやあびつくり郵便受より蝉発てり

行き遇ひて蝉も驚く吾も驚く

晩夏なる机にやたらもの積まれ

蝉時雨やぼ用一つ出来にけり

四つほど採れたるめうが妻に見す

一歩づゝ秋来る空とおもひけり

大人げなく蚊の刺す処掻き壊す

冷奴の他に肴はもう一品

紋章のごとく大蚯蚓の轢死

ぺちゃんこに蚯蚓国道一号線

手を抜けばかうなる見本蚯蚓の死

精悍に紙面馳す蟻吹き損ず

このところ忘れてをりし夏の月

こほろぎの腿に引け目や夏瘦せて

蝉時雨晩年押しつけられてをり

灼かれても青葉が綺麗いたちはぜ

白玉の甘味処を素通りす

端居して退職挨拶読み返す

端居していちばん風の来る処
大西日差すといふより照射せり
晩年は引き算ばかり冬瓜汁
おし黙りころり転倒せる蝉も
つじつまの合ふ句は陳腐蝉しぐれ
大西日蝉の今際いまはに立ち会へる
三人みたりにて苧殻火囲む今年また
反魂草残り少なき休みかな
古漬けの胡瓜つまめる残暑かな
煮南瓜の皮真青なる盆の入
百日紅愛染明王然として
熱線に痛み走れり浜日傘
紅にもう一盛り百日紅
のうぜんの散乱あたり昏れしめず
炎ゆる日の昼餉昆布茶に焼きにぎり
盆過ぎの空の高さを妻云へり
呼び出され西日の中へ出でゆけり
西日中空振り三振シャツトアウト
処暑処暑と口火切りたるつくつくし
灼ける景眼鏡の球を拭くばかり
ゲラ刷這ふ蟻の大きさ9ポほど
仕方なし暑さのがれの昼寝せり
本日の一大事とは苧殻焚
蚊に喰はるところ見せ合ひ母と妻
小遣いの前借りなどして八月盡
炎帝に葉は皆垂れて従ひぬ
まだ青実なれどそのうち梅擬
夏満月近々とあり顔ほとり
満月にほっとする顔寄せにけり
類無く明るかりけり萩透く陽
露の空何かあつては困るなり

のうぜん地に燃え移らむとしてゐたり
夕立性一雨新宿駈け抜けり
蝉飛んでなんだ近くにまた止まる
ぼろぼろの夏果ての鳶岩鼻に
蝉何かに突き当たる音露けしや
引く草がみんな露草ならくちん
露草がひよろりと長けて命日来
朝昼晩餉に出る古漬胡瓜かな
打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる
蚊の声す急いで何か羽織らねば
靱殻枕爽涼の声挙げにけり
蝉飛ぶは粹な小政の旅姿
だいぶ夜の更けし厨を蚊のうろうろ
お寺さま咲かする百日紅が見え
権禰宜めく蠟螂にしてうやうやし
をみなへし朝日に溶けてしまひけり
一降りに闇を正せる夜の驟雨
近づきて遠ざかりては夜の驟雨
打ちつけて傍若無人夜の驟雨
真暗がり打ちてやにはに夜の驟雨
端然として聞く夜半の一驟雨
夜の驟雨納まりかけて来りけり
露の世の木と紙の家震ふ地震
討ち取らる蚊のぺっちゃんこ膝がしら
莫迦鳴きをはばかりもなく軒の蝉
朝夕の落ち着き来る鳳仙花
妻の指す腿の一箇所蚊の圧死
毛虫付き驚き桃の木山椒の木
昼寝して何がなんきん唐茄子かぼちゃ
後退る方は当方墓でなし
墓荒唐無稽の世に生れて

言の葉のでつくわすとは墓にこそ
隠棲の仕方を墓に教はりぬ
断るに墓の威厳を借りたきもの
へどもとと墓に遇ひたること申す
墓が家にわれらが間借りしてゐるやう
墓とことん措辞にこだはりて

*浮世風呂

賢愚邪正貧福貴賤皆裸

裸はだか体の前を押さええて「御免なさい」

日盛りの町の湯に入り私わたくしなし

銭湯の徳を数えて赤裸

裸はだか形にて湯浴び孔子も権助も

お粗末森の石松 三十石道中を悪声ながら勤む蟬

寿司喰いねえ江戸っ子好みの穴子寿司

夜の秋湯屋の板間の節くろぐる

雨風にばらけ初めたり青芭蕉

夏の日の思い出づくり休暇村

研ぐ米の釜に張りつく終戦日

一驟雨頭のもやもやを拉し去る

振れること忘れぬ朱夏の古磁石

揚花火探り当てたる空の芯

揚花火うち抜きし空締めまりけり

葛咲いてやぶらこうじのぶらこうじ

夕日に透き五効ごこうのすりきれ赤とんぼ

白玉にこゑ生き返り「お勘定」

真夏の夢どうせみるなら酒池肉林

ネーム入り傘を貸し呉れ生身魂

夕立あと傘提げチャップリンめく家路

観念し秋暑の路を辿るのみ

ごろ寝して裸の王様すだれ裡

外とに起こることは外とのこと秋簾

考えてもしょうがないこと古団扇
力んでは秋の蚊をまた打ちもらす
ただこねて木馬に乗る子希典忌
風が湧き走り回れりお花畑
墓を守るはらからも絶え鶏頭花
秋の風翳を何處かに忘れ来し
露けしの一語荒野の全て指す
露けしの一語に尽きぬ一遍像
露けしと云へば二の句を挟めざり
秋の蚊の抛ん所なく隅にをる
台風の雨の底抜け箱根町
妻が来て剥ぎとりゆけるすててこ等
蛸壺に一喝くれて海の雷
けふいちにち裸でとほす巴旦杏
釣舟草水は百代の過客にて
定年後夏はつとめて早起きす
瀧壺の轟音に我投げ込まれ
山はそのあるべき姿映す水
あっさりと躰抜けゆく夏の水
膝鳴らし起ちて大暑の水をのむ
葦の間の方寸の水澄みゐたり
夜長妻予期したとほり生返事
案山子見て思いつくことほぼ同じ
問い掛けに返事が返って来ぬ夜長
荒廃の片棒担ぐ藪からし
あめんぼのタップダンサー水叩き
あめんぼの水を踏まえしトウシューズ
武州金澤八景落雷なくはなし
扇風機はたと止まりしまゝ晩鐘
花火果つその大空のみみず腫れ
愛敬を振りまき上る花火あり

目と鼻とおまけに口もある花火
秋初風匂帖持たずば頭に記す
花火果つ五體叩きて砂払ふ
一方に峰雲一方よりタンカー
夜蟬啼くは後悔に似て忸怩たり
夕立の一気呵成のそれが来た
飯支度お手のものなる生身魂
生身魂達者なものよ卵焼く
蟬しぐれ痴呆の母と禅問答
灼け木道一人歩めば一人の音
捨て湯して今日が始まる生身魂
生身魂好き嫌ひなく膳のもの
生身魂野菜サラダに目の無くて
一寸づゝおかずに手つけ生身魂
生身魂何出て来てもマヨネーズ
じつくりと聞く耳持てり生身魂
座睡して楽土に遊ぶ生身魂
夏果ての隠れ煙草を患者らは
ギブス嵌めそれでも煙草炎天下
風死す中あらぬ方見て採血す
落蟬のほとり過ぎゆく勤め人
ふかし諸皮の赤さの切なけれ
夏瘦を挽回せよと通り雨
回覧板届けに晩夏の腰痛持
町中の墓地の空飛ぶ油蟬
その昔原爆忌リトルボーイの降り来しそら
エノラ・ゲイブーンと飛び来て止め刺す
手すさびの手のゆく腋毛八月尽
赤恥をさらす訳には蟬しぐれ
夕立来と妻はクイズを抛り出し
ニュースキヤスター金魚の如きおめめして

夜店より孫を剥がすにくまれ口
生身魂だうした訳からつきよ好き

塔婆より塔婆へ飛んで油蟬

ハンカチがなければないで服で拭く

金魚飼ふといつまで言ひ張るわからんちん
夜宮

金魚掬ひ一回だけと念を押し

生身魂畳を擦りて小用に

立佞武多ゴジラのごとくやってくる

世は移り二束三文バナナかな

ぺらぺらの着慣れしパジャマ夜の秋

こら毛虫ここで会うたが百年目

仏桑花葉巻めく花落しけり

雨の日のペット屋金魚ぷかぷか浮く

海星水族館見学子に手触るとき心臓どつきんこ

ひよろりと長け一寸猫背の実ひまわり

此処天界白さるすべり散るところ

上海嘗て教科書で学べば たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅(あか)く散りゐたりけり

鳳仙花防空頭巾を被る世の

サルビヤは機銃掃射の火噴くいろ

千人針知る人絶えてほうせんか

この道は湯屋に抜けらるほうせんか

また一つ湯屋が潰れてほうせんか

もう了る花と秋待ちゐたる花

秋めくといふ空の下授かる句

秋めくといふこゑ空に吸はれけり

悲しみは追ひかけてくる鳳仙花

ひまわりの根を見ておもふ保水力

岐阜提灯未だ見ぬ世の景見する

岐阜提灯小野小町は野に倒れ

仙厓筆薄と小町のされかうべ

大学芋食うて戦争あやしまず

お隣りは元銀行員水を打つ
紅毛もすなる俳諧杜鵑草
陶片の出てくる畑油点草
いと白き落蟬の腹秋立ちぬ
今日を逃がしてどうする我が家の地震対策
棚の本ときに仇なす震災忌
新米と後ほど聞いて道理とも
新米といはれ一粒灯にかざす
今朝秋の踝汚し戻りけり
茗荷採ここに無ければそこどうか
かたまってカンナ八紘一宇かな
梨重たけれど甘味の保証無し
のろまなる台風と聞きやきもきす
今朝秋のモーニングコーヒーブラックで
そこそこ採れ零余子御飯に一寸足らず
秋雨にガタがきてゐる前立腺
咲き登る夜顔脇の月を見て
夜顔と夕月闇を同じうす
秋刀魚の骨代はって外し遣りにけり
栗剥けと盆と包丁置きゆけり
青柿や党首張り上ぐ第一声
玉すだれ政権どちらに転ばうと
栗ご飯お焦げうれしく釜払ふ
ともかくも選挙終れり赤とんぼ
良夜の足二本重ねて寝まるなり
月見まんじゅう月が食うたか一つ減る
鉛筆をいっぽん置きて月を待つ
二つ飛ぶ夜間飛行の灯も良夜
町中の墓地ぽっかりと今日の月
垢抜けてみゆる月夜の路地てふ路地
満月の下に睦める家と家

月の家ヒゲタ醤油の髭の屋根
手に通す良夜のパジャマ薄黄なる
月見まんじゅうもちもちとして月見の座
望の夜のかさごの煮付け甘かりき
花すすき揺るゝ辺ひねもす釣糸垂れ
虫の音のじんじんとフルオーケストラ
お供物に両手塞がる秋彼岸
線香を身寄りの墓にも秋彼岸
秋扇いっぽん持ちて通院す
刺すことの今旺盛な秋蚊とも
栗飯の栗をごろんと箸に乗せ
認知症とはけつたいな秋彼岸
言替えても痴呆は痴呆秋彼岸
下駄履きの種採日和とはなりぬ
蠅螂の逃げるにあらず尻向けぬ
秋の蚊を振り切りしかと辺りみる
秋草を手折るは釣れぬ証拠なり
種採の封筒ふうと膨らませ
糸瓜忌の一犬吠えれば三犬吠ゆ
どの家にも一つ良夜の玄関灯
判りにくき墓地の地図見て秋彼岸
彼岸^妻花咲きぬし場所を事細か
蜩蝶あちらではたはたこちらではたはた
蜩蝶はたはた舞へば書き割りめく
種採りをしたり片づけごとしたり
虫の音を聞きつゝ庭の片づけごと
鶏頭を引っこ抜くとき土けむり
女郎花今を盛りとなまめきぬ
長啼きのこれにて退散法師蟬
種採のおっとここにはいぼむしり
十六夜の生節の血合いつつき食ぶ

コスモスに高原の日の乗ってをり
コスモスの上に市街地展け見ゆ
アサガオと鉛筆書きの種袋
なあなああの仲の芒と望月と
かまつかの繪手紙暫し繪のちから
はやばやと旭岳より積雪報
日毎咲く芙蓉と共にある生活たつき
気をもませながら秋蝶まだ止まらず
自転車のブレーキキュツと秋の空
通販の庄内米をファックスにて
禅林に木瓜の青実の大知識
冷まじや葉の端の毳けはだつは
秋海棠情にほだされ易く生れ
コスモスに配色といふ一語あり
吾なりに菊の好みを云へば野趣
秋晴れにちよつと自慢の出来る花
セセリ蝶孫、美雨ねずみの如き貌をして
蚊孫、美雨に喰はる処をさうかさうかと揉み
半歩でもともかく前へ草の花
色古りて風船かづらにも老境
橋渡り了ふまでに鯉跳ねたまへ
とんぼ飛ぶ泥亀でいきちよう町とはこの辺り
夜を長く感じ始める灯の許に
つたなきをぬぐひきれずにゐるばつた
河原石手にとることも一秋思
絵が得手の人の手になる萩便り
霧に顕つ岩相岩場の道ゆけり
松虫草ひるがへるここ天界か
足許は草の色して霧の中
外見は一見丈夫羽抜鳥
衣被不義理いちいち気にしては

鮭缶で二膳軽々豊の秋

秋雨にじたばたしても締切日

冷まじや大根下ろしの山素しろし

秋雨に薄く広げて玉子焼

実紫師系を誇るおたんこなす

家中がぎんなん臭くなり雨日

萩叢を雨は手加減して打てり

済む済まぬは香奠のこと鴟日和

白萩は大鳥となり月明に

永六輔精霊ばったの裔ならむ

蠅螂を凝視ひるんだ方が負け

このぶだう旨し笑顔を御礼とす

おほらかに露の凝りしが葡萄とも

昇天の心地ぶだうの一粒に

曰く言ひ難しぶだうの果肉とは

口皺の深々ぶだう食うべけり

ぎんなん落つそびらにいやに大きな音

毛先までぎんなん臭さにまみれけり

ぎんなん採る通りすがりの筈なりしが

ぎんなんの光沢放つ炊き御飯

秋風に団子しみじみ米の味

弁慶草擦り傷つくらぬ子が殖えて

擦り寄りて馴れ馴れしいぞ狗尾草

種採のほか用無き庭となり

もそもそと種採るほかに人気なし

顎髯のいやにちくちく今日の月

描線のみな生きてゐる曼珠沙華

曼珠沙華先づは一輪挿にして

鳳仙花ほどに晩年弾けたし

球根を姿勢正しく植えて遣り

終末の喇叭を吹けり花ダチュラ

栗剥けば手が莫迦になり小休止
山と盛る栗をののしりののしり剥く
剥きづらき栗を手にして長丁場
引き受けし手前剥かねばならぬ栗
かうなれば意地なり栗をとことん剥く
栗剥いて見るのもいやといふ顔す
栗飯の栗の角々灯に栄えて
祭の子強く手を引きねだりごと
登り口そこに団栗捨てゝあり
捨て団栗何故か仔細はわからぬが
いづれ行く彼の世の下見まんじゅさげ
二回目の種を採るとて小雨の中
仲秋の或る晴れた日の耳掃除
種を採る蝶々夫人の唄声に
ずるずると日の経つばかり草の花
冬瓜にこんな食べ方あったつけ
痩せ猫の背中ごとごと月下をゆく
良夜かな家は明りが点りてこそ
秋刀魚焼き年金暮し帳尻合ふ
秋来たり木々の陰翳礼讃す
秋の夜を忍んで日劇ストリップ
犬蓼見てぷらんぷらんと戻りけり
典型的秋晴れ球形ガスタンク
逞しきいとどの腿に及ばざり
虫の名のそのいちいち知らざりき
良夜の本開けたところを先づは読み
良夜の本ここ迄にして寝るとせむ
そこそこの句が出来秋のたんぼ道
朝の鴟切り裂きやすき大気かな
こんな日はひとりがよくし秋初風
拡声器がなり秋暑の声割れぬ

虎造の侠客ものに夜の長し
舌垂らし秋暑にダアと寝そべる犬
向日葵の種子皆窮屈さうにして
朝顔の種こじ開けて下調べ
夕顔の雨にでれつと五つ程
鳳仙花昔はよいことだらけなる
鴟の朝頭機敏に立ち働く
予報士のまたもやヘクトパスカルと
台風に先手打ち鉢取り込みぬ
台風その規模風鈴きりきり舞
煙草買ふ間ありて台風中だるみ
買置きの煙草とライター―台風下
台風の眼のなかジメジメしてゐたり
台風直下こんなものかと空見上げ
台風来庭木を括る紐いろいろ
台風の中出て垣根手当せり
台風下足のベタつく厠板
一灯の他は台風圏の闇
うなばらの涯まで野分一掃す
万象の斯くあきらかに野分あと
雨撥ねて葉ばかり大き秋海棠
野分あとこんななに晴れて目の遣り場
台風のアとの日差しに疲れけり
つくねんと水を味はふ震災忌
ここに来てペ―ス落とせり雨颱風